

検証

崩拓銀

<11> 10.10.17

した危機管理マニュアルだった。

急ぎよ本店四階の応接室に呼び集められたスタッフは企画、総務、資金証券など関連各部の次長らわずか七、八人だけ。週明けに預金の引き出しが殺到するのは目に見えていた。うなだれている暇はなかった。「当面の現金はこれだけ必要か」「どのよう末端の支店まで行き渡らせるか」。論議はそこに集中した。

手形や小切手などを除いた実質預金の二割。これが日銀札帳支店から示された必要額の目安だった。道内の実質預金は約四兆円。計算では約

週明けのバニックが目に見えた。かぶようだった。

開店と同時に預金者がたたれ込み、必死の形相で預金解約を迫る。傍らでは長時間待たされた客同士が列順をめくって声を荒らげる。ついには泣き崩れる女子行員。

昨年十一月十五日の土曜日。昼すぎに自宅から拓銀本店に駆け付けた企画部幹部は、脳裏をよぎる悪夢を振り払うかのように電話にかじりついた。連絡先は西に約三百

「いよいよきたか」。かつ

前夜

てない資金繰りの悪化に、「破たん」を告げる朝方の電話は覚悟をもって受け止めるしかなかった。手元には机の奥深く眠っていた書類がひとつづつ

八百億円を用意しなければならぬ。だが、手元にある現金は約三百六十億円。残りは特融を受け、事前に拓銀の道内百三十四の本支店に運び込

日銀法 千五条に基づく日銀 内百三十四の本支店に運び込

日銀の道内六支店・事務所の



「マゲロ」 硬貨を入れ、ケースは現模的に参考にならな

不安を抱えながら、拓銀の現金レストン輸送は翌十六日夕方から始まった。札帳に残っていた金沢昭雄事務の陣頭

道内各地で、シユラルミンケースを積んだ黒塗りの支店長車が日銀と拓銀支店の間を何度も行き来する。作業がほぼ終わりがけた午後九時前

んでおく必要があった。

実は、数カ月前から、道内の日銀各支店の金庫には平時より多めに紙幣が積み上げられていた。拓銀・道銀の合併発表とそれに続く合併延期

「明日、重大な発表がある。取り付け騒ぎに発展する恐れもある」。「破たん」の事実

は企画部が日銀特融を受けるための特約書を作成している。すでに顧客対応マニュアル

急転直下を告げる金融情勢から、いつ取り付け騒ぎが起きても不思議ではなかったから

しかし、日銀側にもそれで十分と言いつける自信はなかった。都市銀行の経営破たん

前九時の開店に備え、本支店の警備も道警本部に要請済み

失意漂う中 現金準備

河谷慎昌頭取ら役員も東京での臨時取締役会を終え、札幌に戻ってきた。空が白みはじめるまで時間はわずか。運命の一日が始まろうとしていた。

肩書は当時 拓銀問題取材班